
東方大路記

ani

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方大路記

【Nコード】

N7296N

【作者名】

ani

【あらすじ】

よくある使い古された幻想入りの物語。

一人の男が色々な人に助けられながら、目的にむかっていくお話し。

巻話（前書き）

みなさんはじめまして。

小説を投稿するのは今回がはじめてなのですが、誤字・脱字・文法
使い方等

いろいろ突っ込みどころがあるでしょうが適当に流し読みでもして
ください。

できれば、私の小説を読んだ時間が無駄だったと思われない事を祈
ります。

壱話

体の節々の痛みで目が覚め眠い眼を擦り辺りを見回し状況を確認する。

気が付いたら森の中に居た。

山々の隙間から沈みかけの太陽が見え、辺りの鬱蒼とした木々を照らしている。

「・・・ここはどこなんだよ？しかも森の中って・・・あの状況だと普通病院だろ・・・」

もう一度辺りを見渡し自分の体調も確認する。

森は相変わらず人気がなく遠くの方で聞いたことの無い鳥の鳴き声が木霊しているだけ、

体の方も特に可笑しなところは無く持ち物は財布だけ。服装はＴシャツにＧパンと言ういつもの格好、怪我也ひとつも無い・・・

「・・・何で怪我也が無いんだ？バスに追突されて血だらけだったのに・・・擦り傷の後も無いし、・・・もしかして事故から怪我也が治るまでの記憶がないのか？」

たとえ記憶が無いとしても森の真ん中に一人で居ること自体が説明できないのだが、少しでも落ち着こうとして何とか自分を納得させる考えを頭の中でめぐらせていく。

しかし、明確な答えが出るはずも無く太陽が沈みきった頃には考えるのをあきらめる。

「とりあえず人を探さないと。でも夜に山の中歩き回るとさらに迷うってテレビで言ってたな・・・今から歩いて人を探るか日が出て

くるまで野宿か・迷うな」

心情的には今すぐにも人を探して助けを求めたいのだが、先に広がる夜の森は不気味で葉が擦れる音や虫の鳴声がそれを躊躇してしまふ。

「・・・よし、朝日が出てからにしよう！こんな暗いところ歩ける気がしないし回りに明かりがないから人なんて居ないだろ！」

人を見つけられる希望より夜の森の中を一人で歩いていくという恐怖の方が勝ったため日が朝日が昇るまでここで野宿することにしたが、回りに誰も居ないのに恐怖心を覚られたくないためつつい大きい声で喋ってしまふ。

「とりあえずこの大きな木で一晩過ごそう。登っておけば野生動物にも襲われないと思うし」

スイスイと木によじ登り枝に座って幹に体をあずける。

明日の行動をまとめるため考えをめぐらせる。

「とにかく人を見つけよう。場所聞いて知り合いに連絡して状況をしろ。あとついでに病院にも行つとかなきゃな」

明日の行動などすぐにまとまり眠りに付こうとするが、気絶していたからか一人森の中に居る不安からかその夜は一睡もすることが出来なかった。

「・・・やっと日が出たよ。あんまり休んだ気はしないけどとりあえず行動しよう」

木から降り辺りを見回し山が無い拓けていそうな方向へ足を進める。地面は泥濘あちらこちらで根が飛び出てたまに足を捕られてしまいなかなか前え思っように進めない。

「何か樹海っぽいな。足場は悪いしどこまで行っても木しか見えない。迷って出られないってもしかしてマジでそうなのか？記憶が無くなる前に自殺でもしにきたんじゃないだろうな」

「でも樹海って富士樹海しか思いつかないし回りに富士山なんかないよな」

結局どこにも富士山らしき山などなく、森の中に居た原因が自分が自殺しようとしていたただの自業自得だったらどう言い訳しようか・・・と訳のわからない事を考えてると自分が進んでいる先の木々の間から池が見えた。

「水だ！川が繋がってれば人が居るところまで行けるかもしれない！」

先までの疲れもなんのその。森の中を自分が出せる限界まで走りぬける。

途中で何度も足をとられるが目の前の池がゴールであると信じ走りぬけ目的の池についた。

「ハア・・・ハア・・・着いた・・・とり・・・あえず人を・・・フウ」

心臓がバクバクいつているのを落ち着かせ辺りを見る。着いた先は池・・・と呼べるような代物では無かった。沼ともいえず水溜りにしては大きいと何とも中途半端なもので、水は濁っていて水の循環が無く川に繋がっている場所などどこにも見つからなかった。

「マジか・・・たしかに水の流れる音はしなかったけどよくこれはきついぜ。こんな所に人なんかくるはず無いし・・・この水飲んだら絶対腹下しそうだしよ」

水溜りの水を手のひらで掬い二オイを嗅いで見るがあまりの泥臭さに顔をしかめてしまう。

「・・・とりあえず一休みしよう。もう太陽が真上ぐらいだから結構歩いた気がするし」

水辺の周りの木に寄りかかり体を落ち着かせる。相変わらず回りは木々で蓋われ民家などどこにも見当たらない。行けども行けども見つからないゴールに精神的な疲れが見え「ああ・・・俺このまま誰も見つけれず死ぬんだな・・・」と考えている。と、近くの草むらからガサツガサツと何かが近づいてくる音がする。

「人か？・・・イノシシとか熊だったらヤバイな・・・すぐ逃げれるようにしよう」

ガサツガサツという音がどんどん大きくなりだんだん輪郭も見えてきた。目を凝らし出来るだけ早く何が来ているか見極めようとする。

「おお！あの形は人だろ！よかった！これで連絡できる場所教えてもらえるよ」

ついに水辺の周りまで辿り着いたその人物は少年だった。髪の色が緑という見たことも無い色でショートヘア。頭の上に何かついており服装はキュロットと呼ぶのだから知らないがそんな感じ下はズボン。

顔つきは女の子と言われても納得するような中性的な少年だった。

向こうもこちらに気が付いたようでこちらにきている。

「こんにちわ。幽霊のお兄さんはこんな所でなにしているの？」

疲れによるものか、意味がよくわからないが少年が話しかけてくれたのでこちらにも返事をし、自分の状況を説明する。

「ああやつと人に会えたよ。実は森の中で迷ってしまつて助けを求めてたんだ。ここがどこかと町への道を教えてくれないか？」

「・・・別にいいけど、ここは幻想郷つて所でこの森は妖怪の山の麓の周りを囲んでる森だよ。私達はそのまま妖怪の森つて呼んでるけどね」

（妖怪の森？幻想郷？そんな地名聞いたこと無いぞ。地方の呼び方か？）

「じゃあ町がどこかわかるかい？知り合いに連絡を取りたいんだ」

少年は俺の質問に思案顔になると

「・・・町つていうのはよくわからないけど人里なら知ってるよ。でも近くまでしか案内できないんだ」

（よくわからないけど人が居るところにはたどりつけられないな。・・・でも何でこの子は行けないんだ？見つけたとき気が付かなかったけどこんな森の中に一人でいるのも変だし・・・家出でもしているのか？）

「いや、それでもお願いするよ。でも何で君はこんな所に一人でいるんだ？人里に入れないって家出でもしたのかい？」

「お兄さん気が付いてないの？」

驚いたような困ったような微妙な顔で聞いてくる。

「気が付いてないってなにに気が付くんだ？」

「ハア……お兄さんもしかして私のこと人間って思っているでしょ？」

「人間以外の何に見えるんだ？どこからどう見ても普通……とはいえないが（主に、髪の色と頭についているもの）立派に少年だろ？」

こちらの返事を聞いたとたん少年の顔が陰しくなり最後の言葉を聴いたとたんすごい勢いでまくしたててきた。

「私は男の子じゃなくて女の子なの！！確かに見た目は男みたいだけど……それでも顔を見れば普通わかるでしょ！！！！」

すごい剣幕で怒る彼……じゃなく彼女。なかなかおさまらない彼女をなだめるために素直に謝る。

「いや本当にゴメン。服装から判断しちゃったからさが気が付かなかつたんだよ」

「まったくもう……」

何度も謝り、とりあえず機嫌を直してもらったが・

「でも、これが気が付かなきゃいけないことなのかい？」

少年が少女だったことは明らかに関係の無いことだと思っただが・

・

「・・・違っよ。お兄さん言ってたでしょ私が人間どこののつて」

「だから人間だろ？それとも私、実は宇宙人でしたとも言っのか？」

「妖怪だよ」

「はい？」

「だから、私は蛭の妖怪。名前はリグル・ナイトバグ。・・・そういえばお兄さんの名前聞いてないよね。ねえ、教えてよ」

自分のことを妖怪と言い始めた少女に訳がわからずもう一度聞き返してしまう。

「・・・よう・・・かい？妖怪ってあの鬼とか狐とかそういうのか？」

「そうだよ。仲間ってわけじゃないけど一括りに言えばそうなんじゃないかな？」

どうやら聞き間違いや勘違いなどではなく自分のことを本当に妖怪

と言っているようだ。

「でも違いなんてほとんど無いじゃないか。髪の色と頭についている触覚・・・？見たいなもの以外全然変わらないぞ？」

「それはお兄さんが感じてないだけだよ。人里に住んでる人は普通にわかるんじゃないかな？」

つまり自分は人里に住んでる人より鈍感だと暗に言われている。

（どんな直感だよ！こいつ・・・人間じゃねえ・・・とても感じれんのか?!）

「じ・・・じゃあなにが出来るんだ？君が妖怪だって言うならなんか不思議な事が出来るだろう？」

彼女は少し考え

「うん・・・、たとえば人間よりも力が強かったり、私より格下の虫を操ることができるかな？」

「虫を操れるのか？カブトムシとかクワガタとか？」

「うん。普通の虫は簡単に操れるけど妖怪化したり最初から特別な力を持つてる虫は難しいと思う・・・」

（なんか夏休みに重宝しそうだな・・・）

話を聞く限りとっても平和そうな雰囲気だが

「じゃあカブトムシ呼んでみてよ。俺カブトムシ好きなんだ。」

「・・・この季節にカブトムシなんていないよ・・・。私が出るのは近くにいる虫を呼んで命令することなんだから」

確かに森の中は暑くなくカブトムシが行動するような暑さはまったく無く、どちらかといえば涼しく感じるくらいの気温だった。

「・・・まあ呼べないこともないけど・・・出てきても幼虫だよ？動きも遅いし遠くにいたらいつまでたっても辿り着かないと思うし」

まあここで幼虫を呼ばれても空気が死にそうなので別の話題を振ることにした。

「人里の人はなんでわかるんだ？力を振るっている所を見ればわかるかもしれないが・・・それだったら俺でもわかるぞ」

「お兄さんは外から来たからだよ」

「外？ここも野外だが？」

質問をすればするほど疑問が増えていく。返答をもらっているのに終わる気がしない・・・

「私達が今いる所は幻想郷って説明したよね？この幻想郷は周りを大きな結界で囲われているんだって。それを基準に内と外で別れているんだ」

（なるほど結界の中が幻想郷で、外が俺達のいた場所か・・・）

「説明を続けるけどこの幻想郷では妖怪や神様とか普通に信じられているんだ。外の世界ではもういなくなっちゃったそういう者が身近にいるから、そういう物が感じやすいんだろうね」

そういう物なのかと無理やり納得して神様がどうか言っていたが今は関係無いので自重する。

「まあとりあえず納得したよ。じゃあ人里近くまで案内お願いするよ」

「……とりあえずって言うのが気になるけどしょうがない、こっちだから私についてきて」

一通りの質問を終え彼女の先導で深い森の中を歩いていく。森を歩いていると彼女のほうから話しかけてきた。

「そろそろ名前教えて欲しいんだけど」

「……ああ忘れてた。俺の名前は……あれ？そっいえば俺の名前……ってなんだっけ？」

「どうしたの？」

頭の中でいくら考えても自分の名前が出てこない。友人の名前はハッキリと出るのに家族は誰一人として出ることが無い。家族構成や住んでた場所自分がなにをしていたかはわかるのに……

「……思い……出せない。自分の名前が何なのか……どういうことだ？」

「こつちも気づいてなかったんだね・・・」

自分にはまだ知らなくてはいけないことが有るらしい・・・

「・・・お兄さんもう死んでるんだよ・・・」

彼女が何を言っているのかサッパリ解らない・・・俺がすでに死んでいるということは。この言葉を理解していくことに今まで疑問だったことがどんどん氷解していった。

（そういうことか！一人で森の中に居たのも、怪我がまったく無くなっていたのも自分が幽霊なら説明が付く！あんな状況で助かるはずも無いしな・・・）

「おかしいと思ったんだ・・・最初は人里に知り合いが居ると思っただけとお兄さんが外から来たなら人里に知り合いなんか居ないし、そもそも幽霊も妖怪も人里には入れないのに・・・」

・・・心のどこかでそう思っていたのかもしれない。自分はすでに死んでいるということに。それでもわずかな希望にすがって見て見ぬフリをしていたが他人から指摘されてしまったことでその希望は脆くも崩れ去ってしまった。

「そうか・・・もう俺は死んじゃったんだ・・・もう家族にも会えないし友達とも遊べないし・・・やりたかったこともできないんだ・・・」

今にも泣きそうな顔でうなだれている俺を見て彼女が心配そうに話しかけてくる。

「大丈夫・・・じゃないよね。元気だしてって言えないけど・・・これからどうすればいいかきめなくちゃ。お兄さんがこれからどうしたいのか考えないところで停まったままだよ？」

自分より年下の少女に慰められてとてつもない情けなさが身体を包み込み、傍から見たらさぞ滑稽だろうという思いから何とか自分の考えを彼女につげる。

「・・・俺が幽霊なら成仏しないといけないと思う・・・。そういう知識はあんま無いけど。たぶん、そういうものだと思う」

「・・・うん、わかった。お兄さんがそうしたいならそうしなよ。ここまで聞いちゃったら最後まで私も付き合ってあげるからさ」

彼女の返事に驚く。

「いいのか？これは俺の問題なんだぞ？」

「そんなに気にしないでいいよ。最初は道案内だけだったけどここまできたら最後までってね。それに、お兄さんのこと結構気に入ってるし」

何ともありがたいことに自分の成仏の手助けしてくれると言うのではない。右の左もわからないこの土地でガイドをしてくれるなんて

「本当に感謝するよ。でもどうすればいいんだ？成仏の仕方なんてわからないし・・・念仏でも唱えろってか？」

二人して唸りながら考えていると彼女が閃いたようで

「・・・そういえばこの幻想郷のどこかに賽の河原があるって聞いたことがある」

「おお！賽の河原といえば幽霊が行き着く所じゃないか！そこにいけば何とかなるかもしれないな」

「・・・どこにあるかはわからないからとりあえず私の友達に聞いて回ろう」

とりあえず目標は出来たのであとは進むだけだ。目標が成仏するというのがなんともいいがたいのだが・・・

「とにかく君の友達に聞いて回ればいつかは辿り着けるってことだな」

「うん。今から会いに行くけどまた森の中を進んでいくから私の後ろにちゃんとついてきてね」

「ああ、了解した」

こうして今度こそ本当の目的をえて歩き出した二人だったが、不意に彼女から

「私の事は君、じゃなくてリグルでいいよ。でもお兄さんの名前はどうしようかな・・・。いつまでもお兄さんだと不便かもしれないし」

「・・・そうだな。それじゃあ君・・・じゃなくてリグルに考えてもらうかな？」

「私で良いの？」

「歩いてるうちにでも考えといてくれ」

「・・・何か適当だなあ・・・」

「良いんだって。名前っていうのは大事な人とかそういう人から贈られるものだろ？自分でつけるモノじゃないのさ」

「そういうもののなの？」

「そういうもんだ」

こうして二人はまた暗い森の中を歩いていった。

巻話（後書き）

内容がまあまあだったら有難うございます。
つまらんと思ったお方はもうしわけございません。

弐話（前書き）

三人いるので誰のセリフだかわからないかもしれません。

式話

森の中を歩いていく二人。一人はどこにでも居そうな青年で、格好は至って普通のＴシャツ・Ｇパン。この深い森の中だと少し場違いな感じもするが、「この森のことは熟知している」とでも言われればまあ納得出来ないことも無い。当の本人は森どころか田んぼすら見たことが無い都会人なのだが・・・。

もう一人の方はどう考えても場違いな人物だった。青年と言うよりも少年・・・いや少女。緑の髪をショートヘアにし、そこから二本の触覚がピヨコンと生えており体格も小柄な子が、草を掻き分け地面から飛び出す根を飛び越えどんどん前へ進んでいく。

「なありグル。お前さんの友達ってどんな奴なんだ？やっぱり虫なのか？」

これから会う人物・・・？がどんな奴なのか多少なりとも気になる。もしこれから会う奴がすごい恐ろしい奴だったらどうしよう、と少しでも人物像を固めておきたい。

「ん？これから会うのは妖精だけど？」

「・・・妖精？ピクシーとかブラウニーみたいのか？」

いきなりメルヘンチックな感じになことになってきた。

「うーん、そういう感じかな。大妖精っていつて私達は大ちゃんって呼んでるんだけど」

（大妖精だから大ちゃんって・・・大妖精って種族名とかじゃない

のか？)

ついついあだ名の安直差に少し同情してしまったが、自分の名前がどんな風になってしまふのだろう・・・と戦々恐々していると。

「聞ける子がこれくらいしかないんだよね・・・」

「どうしてだ？妖怪って言うのは仲間意識でも薄いものなのか？」

「まあそれもあるけど・・・もう少し別の問題があるんだよね・・・」

どうやらそれ以外にも問題があるらしい。・・・もしかしたら自分がいるからなのかもしれない。もしそうならこれ以上迷惑をかける訳にはいけないと思い話しかける。

「別に無理しなくていいんだぞ？ここまで助けてもらったし目的もできた・・・。もしめんどくさいなら・・・」

「違うよ！！別にお兄さんのせいじゃないし、私がやりたいからやってるんだから！！」

いきなり大きい声で否定してくるリゲル。

「いやすまない。今言ったことは忘れてくれ」

「はあ・・・本当にお兄さんは関係ないことだから・・・」

「じゃあ何が問題なんだ？」

仲間意識が薄いわけでもなく自分が原因でもないとなると、あとは

リグルが聞きに行く相手しか残らない。

「私の知り合いには妖精とか騒霊あとは花の妖怪とかいるけど一番話が聞きやすいのは大ちゃんただだよ」

「・・・騒霊は微妙だけど花の妖怪なんてかなり親身に話を聞いてくれそうじゃないか？」

花の妖怪って響きからついつい可憐で儂く包み込まれる感じのどこかの令嬢を思い浮かべてしまうのだが・・・

「ダメだよ！！機嫌が悪かったら消し炭にされちゃうよ。本当にこの人会うのは最後まで手がかりが見つからなかったらにしよう！！」

リグルが必死に会うのを拒否している。花の妖怪という響きとリグルの説明のギャップが大きすぎてイメージがまったくつかない。

（・・・どんだけ恐ろしいんだよ。牙とか角とかあんのかな？）

「まあ花の妖怪についてはわかったでしょ？星の精霊はイタズラ好きで話を聞く前に

何かされたら面倒くさいし、氷精の方・・・チルノって言うんだけどそっちは話を理解してくれるかわからないんだもん・・・」

「ああ、どうしてその子達に聞かないかよくわかったよ・・・」

とりあえず妖怪・妖精がどんなものなのかすこしわかった。

「そつえば、お兄さんって外の世界で何してたの？」

リグルからいきなりの質問。自分が死んでいたなんてこれっぽっちも感じていないが、実際は死んでいても幽霊……。自分で自分の生前のことを話すことなんてこの歴史上何人いただろうか……

「俺か？あゝ俺は外の世界で大学生をしていたな。」

「大学生？」

「む？大学生を知らないか。まあ簡単にいえば勉強しまくってる人だ」

「へえ、お兄さん頭良いんだ」

「いや、普通の中堅所だったからな……。たいてい頭は良くないな。あとは……。武術が使えるな」

自分が幼少の頃から学んでいる古武術を自慢する。

「武術ってけんぽーか？」

「まあ素手でやるからそうなんじゃないか？それでも家が古武術の家元でな、小さい頃から母親に毎日叩き込まれたもんだよ」

「お母さんに習ってたの？」

「ああ。母親がそっちの家系で爺さんに仕込まれたんだと。親父は婿入りだから嫡子の俺が継ぐことになったのさ」

それから家族や友人、今までの思い出や外にあるもの等他愛の無い話を続けていると……

「お兄さんは死んだときのことおぼえてるの？」

「・・・・・・・・」

今でもハッキリと思い出せる。自分に何がおき、自分がどう行動して、どうなったか・・・

「おぼえているよ。ちゃんと。すべて」

「もしかしたらそこにヒントが有るかもしれない。ほら幽霊って未練があるからなるでしょ？・・・いやなら話さなくても・・・」

「いや大丈夫だ。確かに死んじゃったのは残念だがあのときの行動に間違いは無かったって思ってるからな」

「なにがあつたの？」

自分の最後を思い出す。

大学の帰り道、ウィンドウショッピングを楽しみながら歩いていく。大きな音がし、振り向くと目の前には歩道に突っ込んでくるバス。

咄嗟に避けようとするが視界に小さな子を連れた家族が見える。

動揺してしまったため逃げるタイミングを逃してしまった。

このままでは自分だけではなくあの家族も間に合わない。

この距離ではとても助けることなどできず自分も避ける事など出来ないだろう。

なら選択肢は二つ。

一つ、出来る限り体を丸めて衝撃にそなえる。

ハッキリ言って助かる見込み等ゼロに近い。

二つ目はバスの軸をずらす。

何を馬鹿なと思うが、一つ目の選択肢がゼロに近い生還率しかないなら自分より後ろの家族が助かった方が無駄死により何倍もましだと思った。

バスの正面から右側の位置その前で腰をすえる。全身に力をこめて追突してきたバスにぶつかる。

所詮一人の人間に何トンもある鉄の塊に勝てるはず無いのだが、火事場の馬鹿力か吹き飛ばされずにバスにしがみつことが出来た。そのまま近くの車輪に足が巻き込まれバスはバランスを崩し横転した。

もともと歩道を走っていたためバランスが崩れており、回送車だったので乗客がい無い分重量が減ったことも幸いだった。

「と、まあこんな感じだったな。偶然と今までの努力が奇跡的に重なった結果だ」

「でもその家族はどうなったの？ちゃんと助かった？」

「もちろんだ。ぼやけてよく見えなかったが、ちゃんとみんな助かったってお礼言ってたぜ」

「じゃあよかった・・・のかなあ？」

「ああ。最後に一花つてわけじゃないけど俺はあれで満足だな」

「じゃああんまり関係ないみたいだね・・・」

「死んじまったことに未練があるかもしれんが、それは当たり前的事だしな」

誰だって死ぬのは怖くて嫌なものだ。それが未練として幽霊になっ

てしまっているなら自分ではどうすることも出来ない。生き返ることなんて出来ないのだから・・・

そして自分がこの幻想郷に来てしまった理由がいつになったらわかるのやら・・・

「目的地までまだかかるのか？」

「あともうすこしだよ。そこまで着けば一休みできるから」

「・・・幽霊なのに疲れるってどういうことだ？また謎がふえちまつたな」

「ほら！あとちょっとだからがんばって！」

「大丈夫だって・・・」

こうして二人はこの深い森の中のほんの一部分しかない太陽が入り込む拓けた場所へ辿り着いた。

「・・・やっと着いたか。腹も空かないし喉も渴かないのに疲れだけがでるな」

「うーん・・・やっぱりこの近くにはいないみたい・・・」

疲れた体を休ませるため地べたにそのまま座り込み辺りを観察する。そこは先ほどの暗い森の中とは違って変わり日の光が差し込み、青々とした草葉が差し込む光を反射してキラキラと輝き、森とは別の意味で自然身が溢れていた。決して都会などでは見ることなどできず、いや日本中どこを探しても見つからないくらい神秘的な場所だ

った。

「すごい場所だな……」

ポカンと口をあけて眩く。

「この辺にいないみたいみたいだからここで少し休憩しよう。私は虫を使って回りを探させるからさ」

「あ・・ああ、よろしく頼むよ」

（とりあえず休憩することになったがそういえば俺の名前考えてくれたんだろうか？）

「なありグル？」

「どうしたの？」

「俺の名前考えてくれたか？」

リグルは自分の質問を聞くと、ああそういえばと思い出したかのように返事した。

「ちゃんと考えてあるよ」

「ふん。で、いったいどんな名前なんだ？」

これから自分が成仏するまで使う事になる名前が気になって内心ドキドキしながら聞いてみる。リグルが少し考え込み小さく「……うん」と言って返答した。

「お兄さんの名前はね、甲^{カブトムシ}。カブトムシ好きって言ってたから甲虫の甲、だね。もう少し捻^{ひね}ろうかなって思ったんだけど、私のイメージだと硬くて力持ちって所もいかなって思ったんだけど・・・ダメかな？」

「甲虫の甲ねえ。まあ斬新で良いんじゃないか？リグルのイメージがそれならそれで良いし」

（まあ、マジで変な名前付けられるよりマシだな・・・）

「よし、そうじゃあ俺のことは甲とでもよんでくれ」

「うん。これからもよろしくね、甲」

（これでやっとひと段落着いたな）

「あ・・・虫の知らせが来た。こっちに向かってきてるって」

「本当か？あんまり休んだ気がしないが・・・まあ目的人が来てるならもう少し頑張るとしますか」

リグルが向いている方向に目を向ける。暗い森の奥に小さな影が見えた。それ影がどんどん大きくなり近づいてくるのがわかる。よく見るとその影は草の上を浮遊しているではないか。そのことに驚きながら近づいてくる影を待つ。

「虫で呼んでたのってやっぱりリグルちゃんだったんだね」

「ゴメン大ちゃん。大ちゃんにちょっと聞きたいことがあるんだ」

そこに現れたのは本当に妖精だった。漫画やゲームに出てくるようなありえない緑の髪をサイドポニーにして、鳥？みたいな羽が背中から生えている。顔はとても可愛らしく、少し幼さが残る少女だ。しかし羽が動いてないのに宙に浮いているというまた羽の存在価値がまったく意味を成さないことになっているのだが・・・。

（今までであった妖怪達は二人だけだが、何で二人ともありえない髪色なんだ？羽使わずに浮いてるし・・・。それに幻想郷って日本じやないのかよ？西洋の奴しか会ってないぞ）

「えーと・・・それで聞きたいことってなんですか？」

「うん、実は賽の河原がどこにあるか探しているんだ」

「え？何で賽の河原何て探してるんですか？」

「実は・・・」

さすがに自分の事情は自分で説明しようと

「いや、ここからは俺が説明するよ」

「あなたは誰ですか？」

「ああ、俺は甲って言っただ。よろしくな」

「ええ、はじめまして。私大妖精です。周りからは大ちゃんって呼ばれています」

「実は君に聞きたい事があるんだ。ちょっとした事情があつて幽霊やっているんだが成仏の仕方がわからなくてね」

「ええ」

「それでリグルが言うにはこの幻想郷のどこかに賽の河原が有るつて聞いたもんだからもし知っていることがあつたら何か教えてくれないか？」

大妖精は少し悩んだのち、申し訳なさそうに

「・・・ゴメンなさい。その賽の河原がどこにあるかは知らないんですよ」

「うゝんそうかすまなかつたな時間とらせて」

「いえ、気にしてませんから」

（一番最初からこけるとは幸先が不安だがここで落ち込んでもしようがない）

「ねえ、大ちゃん。他に知ってそうな人知らない？」

リグルが大妖精に次の手がかりがないかと聞いてみると

「それじゃあプリズムリバーの皆さんに話を聞いたらどうでしょうか・・・」

「そっか。幽霊楽団って言うくらいだから何か知ってるかも」

「うん、じゃあ、次の目的地がきまつたな」

「たしか・・・湖の近くにある廃館に住んでるはずだからそこにいつてください」

「よしじゃあ、ちゃっちゃんか向かうかな。リゲル道案内頼むよ」

「じゃあまず霧の湖に行こう。また私が先導するから後についてきて」

（次は廃館に住んでる幽霊か・・・何か知ってるかもしれないな）

「甲さんもりグルちゃんもがんばってください」

「ありがとな」

「大ちゃん、ありがとうね」

大妖精から貰った情報を元に二人は霧の湖近くにある廃館をめざす。

NEXT プリズムリバー三姉妹

参話（前書き）

もうしわけありません。今回は思ったより長くなってしまったため、プリズムリバーの面々は出てきません。次回に登場する予定です。

参話

「おおー！！でかつ！すげー湖だな」

「ふう・・・そんなにはしゃがないでよ・・・そうここが霧の湖だよ」

リグルと二人で森を歩いて小一時間、やっとの思いで抜けた先に見えたのはとてつもない大きさの湖だった。目的地の霧の湖はその名前とは裏腹に霧などかかっていなく、湖の全体像やその奥にもある景色も眺めることが出来た。

「霧の湖って言っても毎日霧がかかっているわけじゃないんだ・・・。そっぴや摩周湖もそんな感じだったけ？」

霧の湖は年間を通して霧がかかる日が多いためそう呼ばれるが、霧の発生にも天候で作用されるためこんな風に全体を見渡せる日が稀にある。

「まあ、こんな風に遠くの景色まで見渡せるなんて滅多に無いけどね」

リグルからそんな情報が耳に入ると、何となく得をした気分になる。

「そうか、それはラッキーだったな。こんな綺麗な景色なかなか御目にかかれないぞ」

また景色を楽しむため辺りを見渡す。そろそろ夕方に近づいてきたのか太陽が黄色から赤に変わろうとし、山の隙間に入ろうとしてい

る。日の光が斜めから入ってくるので湖がキラキラと反射してとてもまぶしい。湖のふちを一周する様に視線を動かしていると・・・

「何だあの家？全体が真っ赤じゃないか。」

湖の近くに何とも派手な赤い館が建っている。この緑と青のコントラストの中で一つだけ明らかに場違いな赤がこの自然たつぷりの風景をぶち壊し、自然保護団体が見たら泡を吹いて気絶しそうなくらい場違いだった。

「ああ・・・あそこには近づかないよ。あそこには吸血鬼がすんでるからね」

「吸血鬼・・・ああ、どうりで真っ赤なはずだ。・・・赤が好きなんだか血を連想させるだけなんだかよくわからんけど」

あそこに住んでるのは吸血鬼らしい。確かに吸血鬼と言えば赤もしくは黒を連想するが・・・。

いくらなんでも屋敷全体を真っ赤にするなんて自己主張が激しいんじゃないか？

「あそこに住んでる吸血鬼は力がとても強いんだ。つい最近異変も起こしたしね」

「異変って何したんだ？」

「この幻想郷全体に紅い霧を発生させたんだ」

「赤い霧ねえ・・・いったいどんな事が起こるんだ？霧ぐらい・・・って言えないか、農作物とかヤバそうだな」

霧がヤバイのはわかる。農作物の影響は半端無いだろうし、．．．
そもそもその紅い霧がどんなのか分かんないのにそれに触れた食
物を食うきがしない。紅いつて何か毒々しいから変な化学物質が
いつてたら．．．

「怖っ！！」

「そうだよ。．．あの紅い霧のせいで下級の妖精がおかしくなつて
所構わず暴れたんだから」

「．．何かリグルと話が噛み合つて無い気もするんだが、まあこ
は気にしない方向で行こう。」

「とりあえず近づかない方向で良いんだな？」

「うん。危ないところには行かない方がいいよ」

あの紅い館には近づかないことになった。まあ、余りにも手がかり
が無かった時に聞きに行くとするかな。そういえば目的地の廃館も
湖の近くに有るって言つてたなと紅い館と別の方を何気なく見渡し
てると．．．

「．．．．なアリグル。人類は翼も無く空を飛ぶことつて出来たっ
け？」

自分達が来た方向から少しずれ、こちら辺で一番大きい山の方角か
ら人影が二人ほど跳んでいるのが見えた。．．確かあの大きな山
は妖怪の山だ。て、事はあの二人組みは妖怪なのか？

「何言ってるの？人間にも飛ぶ奴はいるけど？巫女とか魔法使いとか・・・」

魔法使いはまあ飛べそうだがまさか巫女まで飛べるとは。・・・
じやなく、確かに驚くべき事だが今俺が言いたいのはそういう事じやない。今俺が聞きたいのはあれはいつたい何なのかという事で・

「違う違う、あれだよあれ、むこうに二人組みが飛んでるだろ？」

飛んでる二人組みにむかって指を挿し必死にアピールする。リグルも見つけたようで二人を観察していると、リグルが急に顔を青くした。

「ああ？どうしたんだ急に顔青くして？」

リグルの顔色が急に变化したが原因がわからず先ほどの二人組みをもう一度見てみると・・・

「あれ？一人しかいねーな？」

先ほどまでは確かに二人いた筈なのにもう一度見るとそこには一人だけしか見当たらない。しかもそいつがどんどんこちらに向かって近づいてきてる。

「何でこっち来てんだ？それにもう一人どこだよ？」

リグルの事を心配しつつ、近づいてくる人物と消えた人物を警戒する。どうやらあの二人組みはリグルの知り合いらしい。どちらがそうなのかそれとも両方そうなのか分からないが、とにかく警戒する

にこしたことは無い。そう思い辺りを注意していると、自分達の直ぐ側で急激な突風が発生した。

「ぐあ！！何だこの風！！前が見えねー！！！」

急に起きた突風に吹き飛ばされないように下半身に力を入れてリグルの前に立ちお互いが吹き飛ばされないようにつかみ合う。

やっと収まった風にお互い力を抜き辺りを見ると突風が発生してたと思われる場所に少女が一人立っていた。

「どうもはじめまして。私清く、正しい、射命丸 文といいます」

いきなり挨拶してきた少女。外見は高校生ぐらいの、第一印象は活発で元気な女の子で間違いないだろう。服装は上が和服っぽいのになぜかミニスカート。高下駄を履き頭の上にちよこんと帽子のような物がのっている。・・・衝撃的な登場のせいで返事を返すのが精一杯だ。

「・・・ああ、はじめまして。俺の名前は甲。・・・今の突風は君がやったのか？」

「あやや、これはもうしわけない。つついスピード出しちゃったんですよね」

ついで吹き飛ばされたらたまったもんじゃないんだが・・・

「いやいや空を飛んでるときにウチの同僚が貴方達を見つけましてね、虫の妖怪と幽霊っていう珍しい組み合わせなもんで・・・スクープの予感がして急いできたんですよ」

どうやらむこうからもこちらが見えていたみたいだな。

「虫の妖怪ってリグルのことだよな？君は知り合いなのか？」

「ええ、知ってますよ。まあ、本能的にお互い相容れないと思いますけど・・・」

どうやら射命丸とリグルはお互い知り合いらしい。・・・そういえばリグルはどうしたんだ？突風が起きた後直ぐ側にいた筈なのに・・・。リグルを探すため辺りを見渡すと・・・

「何で木のカゲに隠れてんだよ？」

リグルは直ぐに見つかった。直ぐ近くの森の入り口、そこに生えている人一人が隠れるくらいの木のカゲから半分だけ身を乗り出しこちらを見ていた。

「あやや、やっぱり嫌われてますね」

射命丸が頬をかき困ったように言う。

「二人ともそんなに仲悪いのか？」

「いえいえ。仲が悪いんじゃないくて相性が悪いんですよ。鳥は虫の捕食者でしょ？」

言われてみれば確かに納得できる。鳥は虫を食べる。食べる者と食べられる者じゃあ性格が云々と言うより本能から来ているのだらう。

「私は鳥天狗ですからね。分類的には鳥になるんでしょう」

「あれ？そついやもう一人は？」

そついえばもう一人いたのを思い出し射命丸に聞こうとすると

「一人で先に行くな射命丸。仕事の途中なんだぞ」

自分の上から聞こえる声。どうやらもう一人の方が射命丸を追いかけて辿り着いたらしい。上を見上げるとリグルくらいの少女が射命丸の横に降り立とうとしていた。

「はあ・・・もう一人相性悪いのが到着しましたね」

降りてきた少女は刀と盾で武装しており、全体的に白で統一され服装の一部分に赤が入っている

。頭についてるイヌミミが妙に目立ち射命丸より幾分か幼く見えた。やはり翼は無く、不思議パワーを使って飛んでるのか？

「射命丸こちらの方は？あともう一人はどこにいる？」

「・・・こちらの方は甲さんという方です。あとあなたが探してるもう一人は・・・ほら、あそこの木のカゲに隠れてますよ」

射命丸がもう一人の質問に答えるためリグルが隠れている方に指差す。それを見たリグルはビクツと体を震わし木のカゲに全体を隠してしまった。

「いったい何したんだ？あの怯え方は尋常じゃないぞ・・・」

リグルの怯えっぷりに犬走も心配そうに聞いてくる。・・・どちら

かと言うと射命丸の方に不手際があつたんじゃないかと思つてゐるらしい。

「椛には関係無い事ですよ。私が烏で貴女が狼つていう違いだけですから」

まあ、見た目が犬に関係している妖怪には余り関係の無い話だな。

「・・・意味が良く分からないがまあ良い。それよりも私達は仕事
中だぞ？こんなところで油を売つて暇ないんだからな」

「わかつてますよ。でも、まだ時間はあるでしょう？少しくらい寄り道したつて罰は当たりませんよ」

「そう言う問題じゃないと思うんだがな・・・」

どうやらこの射命丸と椛と呼ばれている少女の仲はあまり良くないらしい。とりあえずもう一人の方にも挨拶する。

「・・・ああ、はじめまして。さっき射命丸が話した通り俺の名前は甲。どうやら仕事の中だったらしいな、じゃましてすまない。」

「・・・いやこちらの責任だから謝らなくていい。私は妖怪の山で警備をしている白狼天狗の犬走 椛だ。」

「二人はどこ向かつてたんだ？」

この二人も俺達が向かう方向にむかつてるみたいだ。

「いや、今日の夜私達の山で宴会やるんですよ。そこに呼ぶ楽士の

方に連絡しに行く途中なんですよね」

「ああ。私達はこれから湖近くにある廃館に向かう予定なんだ」

「あれ？俺達もそこに向かってんだけど。もしかしてその楽士ってプリズムリバーって奴か？」

「あやや、これはなんとも奇遇ですね」

どうやらこの二人も廃館に住んでいるというプリズムリバーに用事があるらしい。

「そちらはどういった用件なんですか？」

射命丸が興味深深でこちらに質問してくる。

「今賽の河原の場所を探していてね。騒霊って呼ばれるくらいだから知ってるかもって聞きに行くんだよ」

とりあえずプリズムリバーに聞きたい内容に答えた。

「賽の河原がどこにあるかなら私もしってますよ」

最初射命丸が何言ってるのか理解できなかった。もう一度その言葉の意味を考え

「・・・ほ、本当か！？賽の河原の場所をしってるのか！？」

「ええ・・・何度かその近くに行った事がありますし。どこにあるかもちゃんとわかりますよ」

「どこに在るか教えてくれないか？」

なんてラッキーなんだ。こんなにも早く目的の情報が見つかるなんて。そう思いほんの少しだけニヤツとしながら射命丸の方を見ると彼女の顔がニヤリと笑うのが見えた。

「ええ、別に教えても良いですよ。……ただし条件があります」

「……条件？　いったい何すればいいんだ？」

少し不安になる。もし変な事だったらどうするか？

「簡単な事です。私の取材を受けてもらいませんか？」

「取材ってあの取材か？　何を聞きたいんだ？」

射命丸からの交換条件は取材だった。別に受けても聞かれて困ることとは何も無いし聞くことも無いはずなんだが……

「私実は幻想郷でブン屋をしているんですよ。文々新聞。って物を発行してるんですがそのネタを探してまして……」

「それで？」

「妖怪と幽霊の異色の組み合わせなんてとても珍しいじゃないですか。妖怪と幽霊が力を合わせ何かしている、なんていいネタになるとおもっんですよね」

確かに、異色と言われれば異色と言わざるを得ないな。力を合わせ

てゝうんぬんは俺がリグルにおんぶに抱っこ状態なので何ともいえないが。

「まあ、周りから見たら珍しいモンなのか。俺は別に良いんだがリグルに方は……」

リグルが隠れている木の方を見ると、こちらの方を見て首を激しく横にフリ必死に拒絶をアピールしている。

「あやや、そこまで怖いですかね……私は虫なんて全然食べないのに。」

「リグル、とりあえずこっちにこいよ。俺の後ろにいても良いからさ」

リグルはおずおずと木のカゲから出てきた。射命丸からは見えにくい、俺の後ろに隠れるような位置まで動いてきた。

「なあリグルどうする？お前が嫌ならこの話は無かったことにするけど……」

とにかくリグルにも意見を聞かなきゃな。今まで助けてもらったし此れからも手伝ってくれるんだ、嫌と言うならこの話は無かった事にしよう。

「……私は別に良いよ。知っているなら教えてもらった方が良いし、本人は苦手だけど別に何かされたって訳じゃないから……」

さっきまでの態度とは打って変わり、こちらの案に賛成してくれるようだ。まだ少し苦手意識はあるみたいだが。……もしかして俺

に遠慮でもしてるのか？まあ、射命丸には俺だけに取材してもらおう。

「と、言う訳でよろしく頼むよ。けど、リグルの取材は勘弁してくれないかな？」

「ええ、もちろんそのつもりですよ。・・・本当は聞きたいんですがこんなじゃまともな取材になりそうにありませんからね」

射命丸にもわかっていたようで、リグルには取材しても余り意味が無いと思ってるらしい。

「そういえば二人は何で賽の河原にむかっているのだ？」

何気なく聞いてきた質問に答えようとするが、あんまりな理由なのでついつい苦笑いしてしまう。

「ああ、それは俺の目的でな。俺は幽霊だろ？いきなりこの幻想郷に来ちまったからどうすれば良いかわからなくてな・・・。とりあえず成仏でもしようと思ってその方法を探してるんだ」

「なんともまあ安直な事だ・・・ではそちらの妖怪は？」

「リグルは途方に暮れてた俺を助けてくれてな右も左もわからない所を案内してくれるって着いてきてくれたんだ」

「ほう・・・なかなか殊勝じゃないか」

感心したように何度かうなづく。

「はいはい、詳しい事はあとで取材しますからこのあとどうするか決めましょう」

「・・・何言っているんだ。私達は仕事の途中だぞ。これから廃館にむかうんだろ」

「わかってますよ。そうじゃなくて、このお二人をどうするかってことです」

「それじゃあ一緒に着いて来てもらうか？」

「それが一番効率が良いんですが・・・甲さんは空を飛べますか？」

「・・・幽霊も空が飛べる事が当たり前なのか。いや、俺は飛べないよリグルと一緒にずっと歩いてきたからな」

「あれ？確かそちらの妖怪も空を飛べませんでしたっけ？」

「・・・な・・・に？リグルもしかしてお前も飛べたのか？」

衝撃の事実！。今までずっと歩いてきたリグルも実は飛べるという、今まで飛べない同士仲良くやってきたじゃないかと、飛べない仲間同士絆を深めあつてきたと思っていたのに・・・

「・・・何言ってるの？甲が飛べない事を知ってたからずっと歩いてたんじゃないか。それに私が飛んだらあの森でどうやって道案内すると思ってるの・・・」

「いや、正直すまなかった。俺が悪かった」

・ なんか飛べることが一種のステータスみたいになっているんだが・

「やっぱり無理みたいですね……。しょうがありません、私と椋で廃館にむかって帰りに拾って行きましょう」

「おい、もしかして山へ連れて行くきか？」

「ええ、そのつもりですけど何か問題でも？」

「問題も何も無いだろう。入れると思ってるのか？」

「そこは大丈夫ですよ。私達が面白い話に興味が無いわけがないではないでしょう？それに私の客人と言えば排除しようなんて事自体なくりますよ」

「……。まあ、それでいいならすれば良い。ただし私からも提案がある」

「なんですか？」

「私達の客人にしろ。貴女より位は低いがそれなりの抑止にはなるだろう」

「はあ……。素直じゃないんですから」

二人の話し合いが終わった用で今後の予定を聞いてみる。

「それで俺達はどうするんだ？」

「私達はそのまま廃館へ楽土に会いに行きます。甲さんお二人はここで待機してください。私達が戻ってくるまで飛ぶ訓練でもしてください。飛べるのが間に合わなかったら私達が運びますから」

「ああ、わかった」

「・・・ついでに宴会に参加してみませんか？私達の客人つて事になるのももちろん安全ですし、貴方達が探していた楽土の演奏も聞けますよ？」

「それはうれしいんだが・・・そんな所によそ者が入って良いものなのか？」

「少数の中では無く、大所帯の中に入るのが何となく辛い感じがする。」

「ご心配なく。そんなに気にしなくともお酒が入れば平気ですし、何か面白い話でもすれば大丈夫ですよ」

「お酒の席では無礼講ということか。」

「では私達も行きましょう。帰りにまたここへ寄るのですから速いにこしたことはありません」

「それじゃあパパッと仕事を終わらせて迎えに来ましょう。お楽しみ取材がまっってますしね。」

「それでは、また後で会いしましょう」

「ええ、では後で」

こうして予定を立て終わり射命丸と椋の二人はふわっと浮き上がり湖を越え遠くの森の方に向かってしまった。

「何か一気に疲れたな・・・しかし手がかりも見つかったしまあよかったな。なあリグル・・・」

と、リグルの方に目をむけると・・・何か機嫌悪いっぽい。

「・・・どうしたんだ？」

「・・・別に。苦手な鳥がいつぱいいる所に行かなくちゃいけないから気分が悪いなんて・・・これっぽっちも思っただけだよ・・・」

あからさまだろその言い方。

「大丈夫だって。そんなに悪い奴じゃなさそうだし、虫食わないって言ってたじゃないか。そんなに心配しなくても何かあったら逃げればいだけだろ？」

「それはそうだけど・・・」

それでもまだ渋ってる。そんなに嫌なのか？

「リグルが出たと言ってたら直ぐに出るさ。それに今日は屋根のある場所で寝られそうだし・・・さすがに女の子に野宿させるのは気が引けるぞ」

野宿なんてあの一日で懲り懲りだ。こっちは都会人なんだぞ？

「確かに、野宿は嫌だね・・・」

「だろ？まあ、何かあったときはそんな時考えよう。それよりリグル、俺に空の飛び方教えてくれよ」

まさか幽霊も空を飛べるとは思ってたが。まあ幽霊って魂だけの存在みたいな感じだから軽そうではあるな。自縛霊とかはめっちゃくちゃ重そうだけど・・・

「飛び方？・・・説明がし辛いんだけど。そもそも幽霊と妖怪じゃ違いが大きいからそんなに参考にならないと思うけど」

「リグルはどんな感じで空を飛んでるんだ？」

「うーん・・・何て言えばいいのかな、こう全身に力を入れる感じで体から妖気を放出するみたいな・・・何かうまく説明できないな」

説明の内容は要領をえずあやふやだ。かなり感覚的なものらしい。

「体からよう・・・き？良く分からないが力籠めればいいんだな？」

とりあえず全身に力を籠めてみる。今まで鍛えていた筋肉が肌に見える部分から主張してくるが今必要なのは筋力では無く、不思議パワーだ。

「はあー！！俺の中に眠れるパワーよ目覚めろー！！」

それから十分くらいフンツとかハアーとかウオオオーとかいろいろ叫んでみるも全く効果が無い。もしかして俺には不思議パワーはこれっぽっちも無い？

「グワーツ！！俺は幽霊の癖に空も飛ぶことが出来ないのか・・・。
飛べない幽霊はただの豚という事なのか！！」

頭を抱え込み地面にうずくまる。折角自分にも空が飛べる可能性が見えていたのに。自分の才能のなさで頭が痛くなる。

「まさかだよ。幽霊には飛ぶ可能性があるというのに、ここにきて適正があるなんて・・・」

「・・・その情熱をもっと別の場所にぶつけようよ」

リグルが呆れたように呟く。

「何言ってるんだ空を飛ぶことは男のロマンだぞ！。しかも何も使わず単独で空を飛ぶなんて・・・どこぞの龍玉アニメみたいな事ができるんだぞ！」

「言ってる事が良く分からないよ・・・」

「くそっ！！何で俺には空を飛ぶ才能が無いんだ！」

一人で盛り上がっている俺を見ていくらなんでもはしゃぎ過ぎでしょ、みたいな感じになっているリグルが少し考え込み・・・

「・・・まだ可能性はあると思うよ」

「な・・・に・・・！？それは本当か！？俺にはまだ飛ぶ可能性があるんだな！？」

「あゝあゝわかったから少しは落ち着いて！」

暑苦しい俺落ち着かせる様に叱る。

「それでどうするんだ？今の俺なら大抵の事はするぞ」

「どれだけ飛びたいのさ……。これは私の考えなんだけど、私達妖怪は体にある羽を使って普通に飛ぶのと妖力を使って飛ぶ二種類の方法があるんだ」

「まあ、普通に羽使って飛ぶ奴もいるだろうな」

今まで見た奴は羽を使ってる奴なんていなかったけどな。

「だけど甲がしなくちゃいけないのは私が飛ぶみたいに妖力を放出して飛ぶ方法だから、甲の中にある力、私で言う妖力みたいなものを認識しなくちゃいけないんじゃないかな？」

「俺にありそうな力ってどんなのだ？」

「たぶん……。霊力だと思う。人間には強い霊力をもった人がいて、代表的なのは巫女だね。巫女は人間なのに霊力を使って空を飛んでるみたいだし……」

生きているときでも霊力を扱える奴なんて……。いるところにはいるもんだな。

「幽霊の俺にはぴったしの力だな。……。それでも飛べなかったら？」

「諦めるしかないね」

今思ったけどさっきの状況とたいして変わってないよね？しかも靈力か……。靈力と言われたら靈銃とかショットガンとか使う靈界探偵を思い出すのは俺だけじゃないと思う……。

「とりあえずその靈力とか言うやつを出すイメージでも強めてみま
すかな」

こんどは余り力をこめず精神統一する。自分の中にあるそれが体から放出されるイメージを何度も何度も頭の中で反芻し、結果が出るのを待つ。

どれくらい時間が経っただろうか？長い時間経った気がするし、それほど時間が経ってない気もする。

「ちょ！ちよつと！ストップストップ！」

リグルが急に慌てだし、俺に待ったをかける。目を瞑っていたため何が起きたかわからない。

「どうしたんだ急に？」

「上見て！頭の上！」

リグルに言われ何が起きたのかと頭上を見ると……

「なんじゃこりゃ？」

俺の頭上に在ったのは幽かに光を放つ青白い球体だった……。頭上30cmぐらいの所にバレーボールぐらいの大きさの球体が風船の様にフワフワ浮かんでいた。

「弾幕みたいだね……。一つしか出てないから幕とは言えないけど……」

どうやらこの球体は俺が出したらしい。リグルは一人で納得しているみたいだが、このフワフワ浮いている玉が妙に気になって感触がどうなのかとつい手を伸ばしてしまった。

「あぶない！」

リグルの警告は遅かった。俺が球体に右手を触れた瞬間に風船が割れるように弾けた。俺の手もその威力で弾かれ、バランスを崩し転倒してしまった。

「うわっ！……」

「大丈夫！？」

こちらに駆け寄り怪我が無いかリグルが聞いてくる。

「掌の皮が剥けちまった……」

「もう！あんまり心配させないでよね」

どうやら俺の怪我は掌の皮が剥けたくらいでその他に外傷は無い。バランスを崩したときうまく受身を取れていたみたいで捻挫もしていない。

「ああ、悪かった。しかしあの球体は何だったんだ？」

「あれは弾幕だよ。私達が決闘するときを使う物で、妖力とか固めてできるんだ」

「弾幕？リグルの説明だとあれは俺の霊力が固まって出来たって事で良いんだな？」

「うん。本当はもっと数多く出して相手にぶつけるんだけどね。こんな風に・・・」

とリグルは湖の方へむき、手を前に突き出しその手を振るった。すると今まで何も無かった空間からいきなり緑色に発光した玉が十数個現る。そのまま直進し湖にぶつかったと思うと小さな水柱が弾の数だけ立った。

「たしかに数が増えれば弾幕だな・・・」

「いきなり出てきたからビックリしたよ。・・・それに人の話を最後まで聞かないからこんな事になるんだからね」

かなりご立腹だ。予想外のこと起きたため対処が間に合わなかったことと、俺がすっかりしていた事の両方に怒っている。

「好奇心には勝てなかったんだ・・・。」

「はあ・・・。それで霊力の存在は感じれる様になったの？」

「・・・いや、今起きた事に驚きすぎて綺麗さっぱり忘れちゃったよ」

あんな衝撃を受けたんだ、覚えていられる訳が無い。

「……まあ霊力が使える事がわかったんだから飛ぶ事はできそうだね」

「結果オーライってことだな」

「……全然反省して無いでしょう？」

「すみませんでした」

調子に乗った俺にリグルがめちゃくちゃ睨んでくる。今にもさん付けで呼んじやいそうなほど怖い。

「はあ……、とりあえずあとは練習だけだよ。弾幕が出せれば靈力もコントロールできるようになって飛べるようになるでしょ」

どうやら練習すれば俺も空を飛べるようになるらしい。……でも今の俺って威力の弱い爆弾作れるボンバーマンみたいなもんだな。

「弾幕って使い道ねーな。何か他の使い方……。淡く光っているからライト代わりに……。って爆発するライトってどこの不良品だよって感じだな」

空が飛びたいのに別の方向性の力が出てしまったなんて笑えない冗談だろう。しかも、使えないし使う気も起きないなんて。

「とにかく今日はもう無理だよ。そろそろあの二人も戻ってくる頃だしすぐに出来そうなものじゃ無いと思う」

「そうだなこっちも休憩して二人が来るの待つか。……掌がジン

ジンしてるから湖で手冷やしてくるわ」

先ほどから右手がヒリヒリする。掌の皮が剥けたことで熱を持ち血が滲んできている。湖のふちに座り込み手をつけると、血が波紋のように広がった。冷たい水に少しの間つけると熱も失われはじめ痛みも徐々に治まってきた。

「やっぱりまだ痛い？」

「ああ、少しヒリヒリするくらいだが握れない事も無いな」

手を握ったり開いたりを繰り返して動作を確認する。

「おまたせしました」

遠くの方から声が聞こえる。どうやら射命丸と犬走の二人が戻ってきたみたいだ。俺達の近くに降り立ちこちらに歩みよって来る。

「いやはや、もうしわけありません。予想以上に時間がかかったやつて・・・って、甲さんは湖に手をつ突っ込んでいたい何をしているんですか？」

射命丸が俺の行動を不思議そうに聞いてくる。どうやら犬走も気になってるようなので二人と別れた後何をして何が起きたか簡単に説明した。

「あやや、そんなことがあったんですか。初心者の弾幕でも危ないものは危ないのに。・・・もしかしたら良いネタになったかもしれませんね」

「・・・まったくいくらなんでも不注意ではないか？」

射命丸にも犬走にも呆れられてしまった。しかしいくら失敗したからってネタのためにやった訳じゃないのに・・・

「それくらい呆れてるって事だよ」

リグルにも突っ込まれて四面楚歌の状態だ。

「・・・今度から気をつけるよ。で射命丸、それでどうすればいいんだ？結局俺は飛ぶことが出来なかったけど・・・」

「そうですね・・・。それじゃあ私が椀のどちらかがおぶって行きますか」

「本気で言ってるのか？」

「ええ、それ以外に方法がありますか？」

高校生ぐらいの少女におんぶされる成人男性・・・犯罪臭と言うより自尊心が崩壊しそうだ。

「恥ずかしすぎるんだけど・・・」

「はあ・・・、甲さんが飛べていればこんな事には為らなかったんですけどね・・・他に考えられる方法は私と椀で両手を引っ張って持ち上げる事も出来るんですが・・・」

「完全に両肩脱臼するな」

「だからこの方法しかないんです。まあ、体格的に私しか出来ないと思いますけど」

「私の体格では持ち上げるのは簡単だがバランスを取るのが難しいからな」

脱臼を取るか羞恥心を取るか。・・・両肩脱臼したらそれはそれで恥ずかしいな。

「わかった、素直に従うよ」

「それじゃあむかいましょうか。・・・っとその前に」

「ん？どうかしたか？」

「いえいえ先ほどから私の事を射命丸と呼んでいるじゃないですか？今度から下の名前、文で良いですよ。むこうで私の客人として呼んでいるのに上の名前と呼ばれては示しがつきませんからね」

「そんなもんなのか？」

「ええ、もともと妖怪の山は排他的な所なんです。しかも今日の宴会は山の妖怪だけですからね、名前を呼び合うくらいの身内じゃないと面倒くさい事が起きそうなんですよ」

妖怪の山はかなり複雑らしい。二人はこんなに友好的なのに、やはりむこうにはよそ者のことを良く思っている奴は少ないのだろうか？

「そうだな、私の事も椋で良い。何かあったら私が射命丸に言ってくれ。なんとかしよう」

「そうさせてもらっ」

「・・・しかし、椀もなんだかんだ言って世話焼いてますね」

文がニヤニヤしながら椀の方を見る。

「私達の客人として呼ぶからな、最後まで世話をするのは当然のことだ。・・・それに私もこの二人事を気にいつてる」

「あやや、そんな素振全然見せて無かったですけど・・・」

「話を聞いて、二人の仲の良さを見たんだ。それに、気に入ってなければ私の客人として呼ぶはずが無い」

うーん、どこが気に入られたのか良く分かんが椀から見た俺達の印象はそれなりに良いみたいだ。

「まあ、それもそうですね。・・・そういえばリグルさんの私に対する苦手意識は少なくなりましたか？」

当のリグルは・・・

「・・・大丈夫だよ。元々、文本人が嫌いなんじゃなくて鳥が苦手なだけだからね」

もう苦手意識は薄いようで普通に話しかけられるまでになった。そういえば文の取材ってリグルが文の事が苦手だから無になったんだよね？この場合どうするんだろう？

「ええ、それでは準備も整ったみたいですし出発しましょう。甲さんは私の背中に乗ってください。椛が先頭を行くので、その後ろにリグルさん、私と続きます」

「椛について行けばいいんだね」

「結局あの山の近くに戻るんだな・・・」

「では、先頭の私が先に行くからな」

先頭の椛が先に飛び上がる。

「それじゃあ皆さん出発です！」

こうして俺達は文、椛の案内で妖怪の山へむかう事になった。

東方大路記 設定資料（前書き）

この作品の備考

この作品は原作、東方Projectの二次創作です。

原作キャラとの性格の不一致、細かな設定等があまりにも乖離してしまっただため急遽、今まで登場したキャラクター紹介を書かせていただきます。

原作による細かい設定が分からずこちらの方で勝手に作ってしまいましたので新たにページを作り設定を公開します。

この作品の時系列は東方地霊殿が終わった後なのでそれ以降のキャラクターが出る予定はありません。

東方大路記 設定資料

名前：甲^{コウ}

性別：男

年齢：20歳

身長：178cm

体重：74kg

髪の色：黒

瞳の色：黒

服装：Tシャツ・Gパン

種族：元人間・幽霊

趣味：資格・免許を取る事・体を鍛える

特技：体を使う事・格闘技（古武術）

能力：霊力を扱う

特記事項：幼い頃から家に伝わる古武術を習っており体力には自身がある元普通の大学生。

大学からの帰り道交通事故で死んでしまい、何の因果かその魂は幻想郷に飛ばされてしまった。

自身が死んでいる事も気づかず最初にいた森の中を彷徨うが、其処で出会ったリグル・ナイトバグに真実を教えてもらい、とりあえずの目標を考え行動を開始する。

幻想郷のルールが外の世界とだいぶ違うので常に聞き役になってしまっているが本人はそれなりに勉学に励んでいたので一般知識が欠如しているという訳ではない。

呼び方

リグル・ナイトバグⅡリグル

大妖精Ⅱ大ちゃん

犬走 椋Ⅱ椋

射命丸 文Ⅱ文

一人称：俺又は自分

名前：リグル・ナイトバグ

性別：女

年齢：中学生くらい（見た目）

身長：そんなに大きくない

体重：軽そう

髪の色：淡い緑

瞳の色：黒

服装：ブラウス・ズボン（膝丈下の短パン）

種族：妖怪

趣味：散歩

特技：虫を操る

能力：虫を操る程度の能力

特記事項：森の中を散歩している途中に偶然見つけた幽霊に興味を持ち話しかける。

幽霊の話を聞き暇だったのでそのお願いを聞いてあげる事にしたが、外から来たために余りにも無知な主人公に何だかよくわからない保護欲が働いたらしく、最後まで付き合う事にした天性のお人よしキヤラ。

実年齢は主人公よりも遥かに高いが精神的なものはまだ未熟らしく、

主人公をダメ兄貴的な感じで見ている。

この作品の説明少女。君がいなければ先へ進めない。

羽を使わず飛ぶ子一号

呼び方

甲〓甲

大妖精〓大ちゃん

犬走 椛〓椛

射命丸 文〓文

一人称：私

名前：大妖精

性別：女

年齢：リグルより幼い

身長：11〜12歳くらい（見た目）

体重：フワフワ

髪の色：緑

瞳の色：青

服装：ワンピースみたい物

種族：妖精

趣味：良く分かんない

特技：謎

能力：謎

特記事項：一番最初の情報提供者。

普通の妖精よりも強い者を大妖精と呼ぶらしいが本名が不明で愛称が大ちゃんと言う安直な子。

性格はかなり良く、主人公の質問を嫌な顔一つせず答えてくれた。

羽があるのにそれを使わずに飛んでしまうので主人公のアイデンティティーを崩壊させる。

羽を使わず飛ぶ子二号

呼び方

甲Ⅱ甲さん

リグル・ナイトバグⅡリグルちゃん

一人称：私

名前：射命丸シャメイマル 文アヤ

性別：女

年齢：高校生ぐらい（見た目）

身長：まあまあ

体重：禁則事項です♪

髪の色：黒

瞳の色：黒

服装：和風っぽいシャツ・スカート・その他小物

種族：妖怪（烏天狗）

趣味：飲酒・パパラッチ

特技：早い・人当たり

能力：風を操る程度の能力

特記事項：風を操る烏天狗の妖怪。性格は人当たりが良く明るい。

仕事のため同僚の椛と一緒にプリズムリバーが住んでいる廃館にむかつていたが、途中の霧の湖近くに幽霊と妖怪の二人組みがいるのを発見。「スクープの臭いがする」と言う言葉と共に椛の静止を振り切って彼らに近づいてきた。

文文。新聞と言う新聞のために二人に近づき、こちらの情報と引き変えにネタを提供してもらう事になり行動を共にする。

同僚の椛との相性はあまり良くないらしく意見がぶつかる事もあるが、お互いの妥協点をみつけて何とかなっている。

ちなみに背中には小さな羽根がある。普段は使われないが、スピードを出したい時や弾幕勝負の時には自分の身長よりも大きな羽が飛び出し風を使う能力と共に驚異的なスピード・旋回力をだす。

呼び方

甲Ⅱ 甲さん

リグル・ナイトバグⅡリグルさん

犬走 椛Ⅱ 椛

一人称：私

名前：犬走 イヌバシリ モミジ 椛

性別：女

年齢：15〜16歳くらい（見た目）

身長：文より小さくリグルより大きい

体重：それなり

髪の色：白

瞳の色：灰色

服装：白の中紅葉などの刺繍がしてある和服・武器・防具

種族：妖怪（白狼天狗）

趣味：将棋（特に大将棋など時間がかかる物）

特技：物または者を探す事・将棋

能力：千里先まで見通す程度の能力

特記事項：射命丸 文と共に仕事をしていた途中霧の湖に何かいるのを発見。自分の能力である千里先まで見通す力を使うと幽霊と妖怪が一緒にいる事が分かり、それを文に伝えたところ仕事を勝手に中断し会いに行ってしまった文を追いかけてきた。

性格は真面目一本。協調性もそれなりにあり始めてあった二人にも親切な態度だった。

文とは折り合いが悪く時たま衝突する事もあるが、それは性格が合わないだけで他の烏天狗にはそれなりの接し方をする。

イヌミミもふもふ。

呼び方

甲〓甲

リグル・ナイトバグ〓リグル

射命丸 文〓文もしくは射命丸

一人称：私

四話（前書き）

今回は前編と後編に別れています。

四話

椀を先頭にリグル、文とその背中に乗った俺という順番で続き大空を妖怪の山へむかつて飛んでいく。もう日は傾き太陽はオレンジ色となり空を夕焼け色に変化させていた。

飛行機以外で空を飛ぶという初めての経験をしたが、下に地面が無いという不安以外はそれなりに良好だ。文のバランスの取り方が良いのか安定しており、このどこかバイクをイメージさせる様な肌に直接当たる風が何とも気持ちが良い。

「いやゝ、少し遅くなりましたね。着いたらもう宴会が始まっているんじゃないですか？」

確かにこのペースだと目的地に着く頃には日も完全に沈んでいそうだな。

「まあ、それならば文の取材を明日に回すんだな」

暗にお前のせいだと言わんばかりに自分の時間を削れと椀が言う。

「・・・しかたありませんね。楽しみは最後まで取っておきましょうか」

自分でも自覚が有るのか反論はせず素直に返事する文。
楽しみと言われてもそこまで期待されることはしてないと思うが。

・・・それにしても文の背中についてる小さい羽が気になってしょうがない。どうやって服から出ているんだ？ってお約束は無しにし

て、この羽がピョコピョコ動いたんびに触りたくてしょうがなくなる。猫に猫じゃらし犬にボール。結局、好奇心に耐えられずピョコピョコ動く羽を摘んでしまった。

「うひゃう!？」

「おわっ!! バランスが!」

摘んだ瞬間文の口から変な声が出てバランスが崩れ落ちそうになる。フラフラと右に左に揺れる体を整えなんとか体制を持ち直させる。

「いきなり何するんですかー!!」

ヤバイ、このまま地面に叩きつけられても可笑しくない位怒っている。。。

このままじゃ本当に落とされそうなのでなんとか言い訳を搾り出そうとする。

「ああ、ほら・あれたよ目の前にピョコピョコ動くものがあると触りたくなるじゃん？」

しかし良い言い訳が出てこずに、その場しのぎの言葉が口から漏れてしまう。

「全然謝る気ないですよね?!」

「いやいや、知的好奇心と言うか探究心と言うかそんな感じのものが・・・」

「やっぱり謝る気無いじゃないですか!! 今あなたに必要な事はじ

っとしている事です!!」

凄じ剣幕で怒られあまりの怖さにビビッテしまう。

「・・・すみません」

「全く!!乙女の柔肌に許可も無く触れるなんて・・・」

「・・・羽だけだな」

つつい揚げ足を取ってしまった。

「何か言いましたか!？」

顔は見えないがギロリッと言う擬音が聞こえた気がした。

「いいえ・・・」

どうやら文は本気で立腹だ。さっきからブツブツと「この両手離しちゃいましょうか・・・」とか「何かやって貰わないと割りに合いませんね・・・」とか不吉な事を言っている。

「ついて来ないと思ったら何をしているんだ・・・」

「どうせ、また甲が何かしちやったんでしょ」

前を行っていたリグルと椀がついて来ない俺達を心配し戻ってきたが、様子を見ればやっているのは痴話喧嘩。しかもリグルには俺が原因だということがお見通しらしい・・・。

「・・・見ればわかるよ。文が怒って甲が謝っているんだから一目瞭然でしょ」

「まったく・・・。時間が無いと先ほど話しただろ？このままでは間に合いそうに無いから先を急ぐぞ」

「ジツとして下さいね！。これ以上何かあったら・・・思わず手が離れてしまいかもしれませんから・・・」

うゝむ、こんな場所から落とされたらスプラッタ確定だ。それだけは勘弁してほしいので素直に了解して先に進む。

それから少し経つともう妖怪の山がすぐ近くまで見えていた。もう完全に日は落ちているのでハッキリとした形は見る事が出来ないが山の中腹辺りに明かりが見える。

「あそこの明るい所が目的地か？」

「ええ、今日の宴会はあそこの広場でやるんですよ」

あれから時間がたったおかげで文のお怒りも少しは収まった様だ。言われた通りジツとしていたお陰でもある。

「野外でやるんだな・・・」

まあ、気温は丁度良さそうだし野外でも問題は無さそうだな。

「なにせ人数が多いですからね、どこかに入ってやるとなるととてもない大きさの建物が必要なんですよ」

「そんなにいいのか・・・」

「それに特設ステージもありますからね。楽士の演奏や私達の一発芸なども開催されますよ」

なんかサラリーマンの忘年会みたいだな……。特に一発芸とか妖怪はいつたいどんなことするんだ？

「あそこの広場前の階段で降りますよ。最初に受付しないといけませんので」

俺達は広場に行く階段の前に降り立ち受け付けをしに行く。受付をしていたのは男の烏天狗だった。体は人間なのに顔はまんまカラス、大きな羽が背中に畳まれているのが正面から見ても分かる。鋭い瞳で俺達のことを睨むが文と椀が説明すると案外すんなり通してくれた。

「あからさまな妖怪って始めてみたよ」

「まあ見た目だけなら人間と変わらない妖怪も結構いますからね」

「それなりに力が無いと人化等しないし出来ない奴は知能が低い奴も多いからね」

要するに見た目が人に近いほど知能も高くなっていくという事か。まあ、一定のラインを超えたら関係無さそうだな。

こうして受付を終えた俺達は階段をドンドン昇り宴会が開催される広場まで辿り着いた。

「すごい騒ぎだな」

階段を昇っている途中にも聞こえていたが広場に着くとそのドンチヤン騒ぎがもつと大きくなった。広場を眺めると、長机が所狭しと並んでいる。端の方では莫座^{もくざ}もひかれておりそのほとんどに人が座っているおり、正面には特設ステージと言われた通りそれなりの大きさの舞台が設置されていた。

「凄い人数の人・・・妖怪だな」

「ええ、先ほど言いましたが山の妖怪が殆ど集合してますからね」

「一部の警備部隊以外の殆どがココに集まっているからな」

妖怪の山にはこんなにも妖怪がいるらしい。広場がほとんど埋め尽くされている。

「はあ・・・こんなに集まっているのを見るのは私も初めてだよ」

どうやらリグルもこんなに集まっているは初めてなのか。

もうすでに宴会は盛り上がっているのか座っている妖怪は酒を飲み食事をし、その周りをせかせかと動き料理や飲み物を補充している者もいる。

「いや、凄いな・・・それで俺達はどこに座るんだ？」

「もうすでに席は取ってあります。あのステージの直ぐ近くなんでお酒と料理を持って移動しましょう」

こうして俺達は料理を選ぶため長机の近くまできたが凄い料理の数だ。その殆どが和食だが中には豚を一匹揚げたような中華料理等も見える。デザートも饅頭やらお餅やらバリエーションも中々豊富だ

った。

「そついえば幽霊って飯食えるものなのか？」

今までお腹が空いていなかったが、この料理の二オイを嗅ぐと急に空腹感が出てきた。いまいち生きていた頃の自分と違いが分からない。

「別に気にしないで良いんじゃないですか？普通の料理ですし」

「・・・まあそうだな。こんなに美味しそうなんだから我慢するのは勿体無いか」

文に言われた通り今日は宴会だ楽しまなくちゃな。それなら俺も酒を飲むとするか・・・焼酎しか無いな。

「ビールは無いのか、ビールは」

「ビールって何ですか？」

どうやらこの幻想郷にはビールは無いらしい。ウイスキーはもちろんの事、カクテルも無さそうだ。有るのは焼酎・泡盛そしてなぜかスピリタスが少し置いてある。

「・・・なんでビールが無いのにスピリタスが置いてあるんだよ」

「ああ、それは外の物なんですよ。何かどこからか持ってきたらしいですよ」

細かい事は気にしない方がいいらしい。焼酎をロックで飲んだら明

日に響きそうだから水割りにしとか、と適当に酒と水を取る。

「料理は取れましたか？それじゃあむかしましょう」

俺達が休むところまで辿り着きそれぞれ思い思いに取った料理と酒を並べる。俺が取ったのは殆どが主食で肉野菜や魚のフライなど脂っこいものを、リグルはと言うと主にデザートが中心で、椋は全体的にバランスが良い料理を取っていた。そして文はと言うと……。

「お前ツマミしか取って無いじゃん！！しかも酒多すぎなんだよ！！

そう文が持ってきた料理のその全てがおつまみだった。あとは焼酎のビンで4〜5本抱え込み、もう見た目からして典型的な飲んべいのだった。

「はは、良いんですよ。なんて言っただって今日は宴会ですから」

「呆れて物も言えないな……」

「いくらなんでも飲みすぎでしょ……」

リグルも椋も文の行動に呆れてしまう。

「ほらほら、どんどん食べちゃいましょう。冷めると勿体無いですよ」

そう言った文の言葉を切欠に俺達は思い思いの食事に取り掛かった。どうやらここにいる皆がお酒を飲むようで、見た目が年下の彼女たちが飲んでいるところを見ると違和感があったでしょうがない。少し

経つと俺にもお酒が回ってきたみたいでつい余計な事を聞いてしま
う。

「そっぴゃく外の世界じゃ20歳未満は酒を飲めないって約束事があるんだがこっちでは気にしないのか？」

「何言ってるんですか、こっちではそんなこと聞いた事もありませ
ん。それに私達は妖怪ですよ？人間の尺度で測らないでください」

妖怪に人間の法律を言っても意味が無いか。幻想郷にはそういう物
が無いのが当たり前なんだな……。

「……それとも、暗に私達が年食ってる、とでも言いたいんです
か？」

うーん、文が俺の言葉を勝手に深読みするから面倒くさくなりそう
だ。

……でもみんなの年って幾つなんだ？妖怪なんだから俺よりも年
がいつてそうだけど……

「なあ、妖怪って長生きなのか？」

「まあそうですね。中には何千年と生きる妖怪もいるらしいですけ
ど」

そんなに長生きするのか。人間80年と言われているが鶴は千年亀
は万年みたいなものだろうか？

「もしかしてお前達って俺より年上なのか？」

長い年月生きていても人間の寿命に換算したらたいした事は無いのかもしれない。いやそれでも十分長生きなんだが・・・。

「女性に年齢を聞くのはマナー違反だぞ、甲」

「そうだよ、此れでも甲よりはずっと長生きしてるんだからね」

椀が苦言を呈してくる。どうやら本当らしい。見た目年下のリグルも椀も実はスッゴイ年上だったのか。椀にはそれなりの落ち着きがあるが文とリグルはちよつと・・・。

「なにか？」

文がにつこりと笑っているが目が笑っていない。女性にこの話はやはりタブーだった。

「いや・・・、それよりも今度から敬語で話した方がいいか？」

実際に、年上なのだから敬語の方がいいかもしれない。

「別にいいですよ。今更って所ですな」

「私も砕けた感じで構わない」

「いきなり敬語で話されても変なだけだしね」

確かに今更だろう。それに仲が良い奴に砕けた態度で接してきたのに今更敬語と言うのも確かに変な話だ。

「じゃあこれからこの感じでいくよ。・・・まあ見た目が年下の

奴には注意しとこうかな」

「その方が身の為ですよ、中にはプライドが高い奴もいますから。まあ私は記者ですから取材を受けてくれる方には失礼が無いようにしていますよ」

「私には適當だがな」

椀が文の普段自分に対する態度に不満をつぶやく。

「同僚や部下には気にしませんよ。・・・上司には使いますけど」

こんな感じで皆ワイワイガヤガヤ料理を楽しみお酒を飲んでいると、ステージの方で動きがあつた。どうやら司会の白狼天狗の女の子がイベントの開催を知らせてるらしい。

「おっ？何か始まるみたいだな」

「もうイベントの時間みたいですね。確か最初は一発芸だったと思うんですけど」

ステージの上にどんどん参加者が並んでいく。天狗はもちろんあれはどうやら鬼みたいだ。なんか背が小さいが頭に大きくて捻じれた角が二本生えている。他に目立つ人は、・・・なんか背中に注連縄みたいなものを背負っている女性がいる。見るからに重そうな物を背負っている彼女はいったい何をするのか気になる。

「ずいぶんと個性的な面々だな・・・」

「そうですね。今回の一発芸にまさか守矢の神様まで出ているとは

「思いませんでした」

「神様？　いったいどれなんだ？」

「ほら、あそこに注連縄を背負っている女性がいるでしょう？　あの方がそうですよ」

文は先ほど俺が注目した女性を指差しあれが神様だと言う。

「あれが・・・？　圧倒的に注連縄の印象が強すぎて分からないぞ・・・」

「

「ああ、あれがこの妖怪の山に住んでいる神の石柱の八坂　神奈子だ」

妖怪や妖精だけでなく神様までいるとは・・・。なんかこの調子だと天使とか悪魔、はてはドラゴンが出てもおかしくない状況だぞ？

「あの人たちは本当に人騒がせですからね」

文は少し困った様な複雑な気持ちで言う

「何か起きたのか？」

「少し前にいきなりこの山に現れたんですよ、神社ごと」

「神社？！　神社ってあれかあの神様を祭るでかい所か？」

いや、建物ごと此処に来るなんてどうやるんだ？

「ええ、元々は外の世界にいたらしいんですが、信仰が集まらなくなったためにこちらへ引越してきたようです」

外の世界にいたのも驚きだな。こちらに引越してきた理由が信仰が無くなったからってのは、外の世界では世間一般に神様が信じられなくなってきたから

そのような事態に陥ったのか。

「それ以外にも地下にいる鳥にもヤタガラスの力を譲渡してエネルギー革命がどう・・・とか言っていたな」

「はあ・・・そのおかげでこっちはわざわざ地霊殿くんたりで異変を解決しに行ったんですよ」

「そりゃあ大変だったな・・・」

神様がエネルギー革命なんてかなり世俗に染まっているな・・・。
確かにこの幻想郷ではあまり科学技術が発達してないようだ。そういう知識を持つ神様ならこの場所での生活が不便に感じるのかも知れない。

「ほら、そろそろはじまるみたいだよ。」

リグルが始まる準備が出来たのを教えて皆でステージの方へむく。
ステージの上で順番に芸が始まった。ある奴は酒を口に含みそれを霧状にはいて着火させ火吹き芸を見せる。

またあの鬼は、ステージの外から自分で持ち込んだ自分より何倍もある大岩を持ち込みそれを何度かお手玉のように持ち上げる。いきなり大岩を一気に高く放り投げたかと思うと力が失った大岩が重力に引かれて落ちてくるが、彼女はその場をジッと動かさずぶつかりそ

うな所でその大岩に鉄拳をぶつけた。どう考えてもあの少女がペチヤンコに為ると思うが予想とは違い、拳がぶつかった大岩のほうが衝撃に耐えられず粉々に粉碎してしまった。砕けた破片が当たりに散らばり食べ物の中に入ってしまうと言う被害を受けたが今までで一番の迫力だった。

「迫力あるな……。まるでCGみたいだ」

「まあ、鬼に力があるのは当たり前ですけどね」

俺達がやるような普通の芸から人間にはとても出来る事じゃない芸まで様々なことが起きている。

次に現れたのはあの注連縄を背中につけた彼女、八坂神奈子だった。

「ああ、皆の衆、この宴に私達を招待してくれた事を感謝するよ。そのお礼と言っては何だが私も盛り上げるために人肌脱ごうと思っている」

おおー！と言う歓声が辺りに沸きこの山の神の一柱である彼女がいたい何をするのかと言う期待感が辺りに充満する。

「それじゃあ行くよ！」

八坂は両手を上に上げるとその場所に数え切れないほどの弾幕が出てきた。その弾幕たちはぐんぐん上昇し一定の高さまで昇ると爆発を起こし綺麗な花火になった。空で花火が瞬いている間も八坂は弾幕を撃つのやめずその姿はマシンガンさながらだった。

「きれいだね」

「見事なものだ」

「なかなか乙なものですね」

文・椛・リグルもその輝きに心惹かれていた。

10分ぐらい経った頃無数に飛んでいた花火は無くなりまた星空が映し出されていた。

「どうだったかい季節外れの花火は？なかなか良いもんだろ？」

此れ以上無い位盛り上がった一発芸大会は幕を閉じた。

「次はあれですね、プリズムリバー達の演奏会」

ステージに目をやると一発芸をしていた者達はすでに壇上に居らず、次に始まる演奏会のため汚れた舞台をスタッフが片付けているところだ。

「もうあう意味は無いけどやつと拝めるんだな」

「そうだね、本当だったら私達が合わなくちゃいけない相手だったのに」

そうこうしているうちに壇上に三人の少女が現れた。それぞれ自分の周りに楽器をフワフワと浮かせて演奏の相談をしているみたいだ。それぞれがヴァイオリン・トランペット・キーボードを使っているらしいがキーボードって電気どこから引っ張ってくるんだ？

「ええ、皆さん始めまして、プリズムリバー楽団のリーダー、ルナサ・プリズムリバーです。今宵の宴に参加させていただきまことに

ありがとうございます。ぜひ私達の演奏を最後まで聞いていつて楽しんでください」

こうして彼女達の演奏が始まる最初の方はこの場を盛り上げるかのようにとても明るい曲が流れていく。途中バラードみたいに静かな曲が流れるがその音色が美しく聞いている皆が聞き入る。最後の方になるとそれぞれがソロでヴァイオリン・トランペット・キーボードと演奏しそれらが一つの曲になり合唱して演奏会の終了となった。

「いい演奏だったな・・・」

「こういうの初めてだけど感動しちゃったよ」

リグルの評価も高いようだ。彼女たちの演奏はどこか人を引き付ける様な心に響くようなそんな何かがあるかもしれない。

「さて演奏も終わりましたし、そろそろお開きですかね」

「もうそんな時間か？」

楽しい時間は過ぎるのが早いと言うが本当に早く感じた。

「ええ、この後はそれぞれ個人個人で飲み会なので料理の追加も無くなります。と言うより皆さん此処で一日中飲んでるはずですから片付けは明日の昼くらいですけどね」

「じゃあ今夜はここら辺にいればいいのか？」

「はい。私と桜は挨拶周りに行きますのであなたとリグルさんはここにいて下さい」

文は面倒臭そうに辺りを見渡し誰から挨拶するか、近くに居ないか等ズボラな考えが過ぎっていた。宴会のときくらいゆっくり飲みたいものだが妖怪のコミュニケーションを円滑にするには交友関係を良くしとかなければならないと、中間管理職のサラリーマンと同じような思考をしていた。

「それでは行くか」

椛が腰を上げ文と共に行く準備をする。

「それではまた後で迎えに来ます」

こうして二人はまだ賑わっている人波の中にまぎれてしまった。

「じゃあ、俺達ももう少し楽しむかな？」

「そうだね、せっかく何だからもう少し楽しもうよ」

いつもの二人だけに戻った俺達はお互いにお酒も進みくだらない話で盛り上がった。

四話（後書き）

後編へ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7296n/>

東方大路記

2011年10月7日23時35分発行